２０２４．１１．３（日）使徒２０：７～１２

20:7　週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日に出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。
20:8 私たちが集まっていた屋上の間には、ともしびがたくさんついていた。
20:9　ユテコという名の一人の青年が、窓のところに腰掛けていたが、パウロの話が長く続くので、ひどく眠気がさし、とうとう眠り込んで三階から下に落ちてしまった。抱き起こしてみると、もう死んでいた。
20:10　しかし、パウロは降りて行って彼の上に身をかがめ、抱きかかえて、「心配することはない。まだいのちがあります」と言った。
20:11　そして、また上がって行ってパンを裂いて食べ、明け方まで長く語り合って、それから出発した。
20:12 人々は生き返った青年を連れて帰り、ひとかたならず慰められた。

＜説教＞

本日の聖書箇所に書かれていることは、トロアスという所での出来事です。先主日に読んだ箇所によると、〈この人たち〉つまりパウロの同行者たち(20:4)がコリントから先にトロアスに行って、そこで〈私たち〉つまりパウロやルカたちを待っていました(5)。パウロたちはギリシアのコリントからマケドニアを通ってエルサレムに帰ることになった(3)ので、これまで通って来た道を戻るように進んで、〈種なしパンの祭りの後にピリピから船出し…五日のうちに、トロアスにいる彼らのところに行き、そこで七日間滞在し〉ました(6)。

その七日間に続く〈週の初めの日に〉パウロやルカそして同行者たちは〈パンを裂くために集まり〉ました(7)。当時既に日曜日にはキリスト教会の集会が定例的に開かれるようになっていたようです。既に前にパウロが書いていたコリント人への手紙第一にも〈あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい〉(Ｉコリント 16:2)とあり、日曜日の集会と、その中での献金ということが教会で行われるようになっていたことが分かります。そして〈パンを裂く〉こと、〈パンを裂いて食べ〉(11)ることは、今私たちが「主の晩餐」「聖晩餐」「聖餐式」等と呼んでいることを指していると考えていいでしょう。それは「わたしを覚えて、これを行いなさい」(Ｉコリント 11:24,25)との主イエス･キリストのみことばに従ってのことでした。パウロもそのことを語ったかもしれません。そして、パウロが〈人々と語り合い、夜中まで語り続けた〉、また〈長く語り合っ〉た(11)とは、もちろん単なる世間話やおしゃべりではなく、主のみことばを語った、みことばの説教をした、また主のみことばによる奨励をしたということでしょう。そして語られた主のみことばに対する人々の応答もあったということでしょう。更に言うなら、〈パンを裂くために集まった〉その時のパウロの説教は殊に、私たちの罪のために十字架でご自身の肉を裂かれ、血を流して死なれた主イエス･キリストのこと、その主イエスのよみがえりのこと（cf. Ｉコリント 15:3−4)が中心だったことも大いに考えられます。なお、6 節にあった〈種なしパンの祭り〉とは、「過越の祭り」とほぼ重なっています。パウロたちはやはりそこでもユダヤ教の祭りをしたのでは

なく、〈私たちの過越の子羊キリスト〉（Ｉコリント 5:7）として十字架で肉を裂かれ、血を流され、自分たちの罪人を贖ってくださったイエスの死と復活を覚えて「キリスト教」の礼拝を捧げたに違いありません。

そんなわけで、パウロは普段にも増して多く語ることがあったのでしょうか、そして〈翌日に出発することにしていたので〉、この日しか時間がありませんでした。それで延々と〈夜中まで語り続けた〉のです。

このとき、大変なことが起きてしまいました(9)。〈抱き起こしてみると、もう死んでいた〉とは医者であるルカの間違いない判断だったというのはその通りでしょう。〈パウロの話が長く続くので、ひどく眠気がさし〉たとあります。理由は他にも、その日の労働で疲れ切っていたのだろうとか、〈ともしびがたくさんついていた〉(8)ので空気が悪く、酸素不足になったのだろうとか言われていますが、実際そうだったのでしょう。また、なぜ〈窓のところに腰掛けていた〉のか、それは仕事を終えて駆けつけてみたらもう人々でいっぱいだった（だからともしびもたくさんついていた）から仕方なくだったとか、そもそも初めから眠り込むつもりは全くなく、たとえ疲れていたとしても、パウロが話すことをちゃんと聞こうとしたからこそ敢えて寝るのには危険な〈窓のところに腰掛けて〉、眠らないように必死で耐えたのだとか言われます。これもそうだったのだと思います。それでも眠いときは眠い、〈とうとう眠り込んで〉しまい、転落死してしまいました。

もちろん人々は大騒ぎ、混乱し、取り乱しました。〈しかし、パウロは降りて行って彼の上に身をかがめ、抱きかかえて、「心配することはない。まだいのちがあります」と言）〉いました(10)。〈心配することはない〉とは「騒ぐことはない、取り乱すことはない」ということです。パウロは全く騒がす、取り乱しもしませんでした。もちろん説教は中断して、〈降りて行って彼の上に身をかがめ、抱きかかえ〉ました。そして主なる神に祈ったに違いありません。神は確かにその祈りに応えてくださいました。そして何よりも主イエスがご自身のみことばが真実であることを証してくださいました。すなわち、その人の罪のために十字架で肉を裂かれ、血を流して死なれ、三日目によみがえられた主イエス・キリストを「信じる者は死んでも生きる」というみことばです（ヨハネ 11:25）。この「よみがえりであり、いのちである」（同）主イエスをパウロは本気で信じ、またこの主イエスがこの〈パンを裂くために集まった〉現場に確かに聖霊によっておられると本当に信じていたのです。パウロが〈夜中まで語り続け〉た話、「長く続けた話」は何だったのか。それは既に考えました。真の〈過越の子羊〉として私たちの罪のために十字架で肉を裂き、血を流して死なれた主イエス・キリストのこと、そして葬られて三日目によみがえられた主イエス･キリストのこと、このお方を信じる者はその罪がすべて赦され、神の刑罰を免れ、死んでも生きる永遠のいのちを与えられること、それ故、このお方こそ真の救い主であること、このお方が今も生きて働いておられ、信じる者とともにおられること、そういうことだったに違いありません。

そう信じて語ったパウロは何事もなかったかのように集会を再開し、そしてトロアスを出発しました(11)。

人々は一旦は取り乱し、大騒ぎになりました。短い間とはいえ「主イエス･キリストを信じている私たちの中で、なんでこんなことが起きるのか。パウロの言っていること、私たちが信じていることは本当なのか」と疑い、不信仰の思いになったかもしれません。し

かし彼らは〈ひとかたならず〉、つまり大いに〈慰められ〉ました(12)。もちろん、主イエスが慰めてくださったのです。主イエスが、パウロの語ったことは確かだ、本当だと証してくださったのです。主イエスご自身が、ご自分が罪人の罪を赦し、死人をも生かす真の救い主であることを証明してくださいました。本当の慰め、「生きるにも死ぬにも、私たちのただ一つの慰め」はこの主イエス・キリストであり、このお方のうちにあります。

〈パウロは降りて行って〉死んだユテコの〈上に身をかがめ、抱きかかえて〉くださいました。その姿は旧約の預言者エリシャを思わせます(Ⅱ列王記 4:33−35)。しかし同時に、いやそれ以上に、それは天からこの地上に人となって〈降りて〉来られ、私たちの罪のために十字架で死なれ、そして復活されて、〈自分の背きと罪の中に死んでいた〉(エペソ 2:1)私たちをいわば〈抱きかかえて〉くださり、罪を赦し、ご自分のにある復活のいのち、永遠のいのちをもって生かしてくださった主イエス・キリストの姿に似ています。